

I・HEAP (Historical Thinking for History Teachers)

17章：歴史的思考を発達させるウェブサイトの使用法

担当：池尻良平（東京大学大学院情報学環）

ikejiri@iii.u-tokyo.ac.jp

著者

・ James Goulding

2006年に、Macquarie大学で近現代史の学位を取得

2006-2007年に歴史の教師も経験

2018年に、シドニー大学で教育学の博士号を取得

2021年からNewcastle NSW大学にLectureとして従事

研究関心 | オンラインにおける歴史的思考

主要な論文 | Historical Thinking Online: An analysis of expert and non-expert readings of historical websites (Journal of the Learning Sciences November 16, 2020)



■用語

- ・ historical evidence | 歴史的証拠
- ・ historical source | 歴史資料（歴史の情報源）
- ・ source | 情報源

■議題

- ①Wayback Machine や Wiki の授業導入は面白いが、実践上どんな問題が起きそうか？
- ②教師教育として、どのようなやり方を取ると受け入れられやすいか？

■イントロダクション (p.231)

- ・ 本章の目的=歴史の授業におけるデジタルリソースの使用について考えるための、広範で原理的なアプローチを提供する。

■教室と「リアルな世界」の間にある認識論的なギャップ (pp.231-233)

- ・ 著者の最近の研究で、歴史に関するウェブサイト (Wikipedia) を生徒に評価させた
 - Wikipedia は、課題に対する基本的な事実を与える点で非常に便利であると回答
 - 一方、信頼できる情報源とは見なしておらず、研究上で引用はしないと回答
- ・ 教師から与えられた情報や教科書の情報の信頼性についても生徒に質問
 - 「授業では信頼できるが、リアルな世界で信頼できるかどうかはわからない」と回答
 - 「たとえ嘘であっても、教室の中では真実である」と回答
- ・ 信頼性はあるが、引用可能とはみなされないオンラインソースのカテゴリがあることは、

批判的な歴史的思考を育成する上では逆効果になる

- ・ウェブサイトは、他の歴史的な情報源と同じく、多様なグレイの色合いを持つ豊かなもの
- ・歴史教育の中心的な目標（=民主的なシティズンシップへの参加を準備させること）を考えた場合、教室とリアルな世界の認識論的な上記のギャップがあることは問題である

■歴史の授業ではどのようなタイプの思考を教えるべきか？（pp.233-235）

- ・批判的な歴史的思考の核は、歴史的証拠の概念にある
- ・批判的な歴史的思考は、1970年代のウィンダム改革以来、オーストラリアのカリキュラムの中心になっており、これは1980年代のイギリスのSHPの影響を強く受けている
- ・1990年代初頭にWineburgの研究によって、上記の流れは加速した
 - 歴史的思考の中心的な3つの読解方略を発見＝「出所を明らかにすること」、「確証あるものにする」、「文脈に位置付けること」
 - 個人のテキストに対する認識（歴史的証拠の概念）が決定的に重要
 - Wineburgの成果は、歴史的思考に関する研究的伝統を強化し、歴史の探究において授業中により多くの資料を使うことへシフトさせた
- ・Wineburgに続き、歴史的思考の理解に大きく貢献したのがSeixas
 - 認知的なヒューリスティックではなく、歴史的思考の概念に焦点を当てた
- ・現在のオーストラリアの歴史のカリキュラムに歴史的思考の概念が存在するのは、主にアメリカとカナダで行われた約30年分の研究の成果といえる

■歴史資料としてのウェブサイトの使用（pp.235-240）

- ・本章の主題（オーストラリアの歴史教師が生徒に対し、豊富な歴史資料としてウェブサイトを紹介する）を扱うよう促すにはどうすればよいか）を紹介する

（1）型にはまった情報源でフレームをシフトする

- ・型にはまった情報源は、インターネット上の教科書と考えられる
 - 物語の内容、画像、音声、動画、関連する問いが含まれる
 - 教育者に向けた具体的なガイドラインやリソースも含まれる
- ・オーストラリアの場合、以下が良い例である
 - オーストラリア戦争記念館（AWM）（2018年） | <https://www.awm.gov.au>
 - オーストラリア国立図書館（NLA）（2018年） | <https://www.nla.gov.au>
- ・専門的にキュレーションされており、オーストラリアのカリキュラムに沿っている
 - 手軽に授業のベースにできる一方、情報源とみなされにくい問題点がある
- ・ウェブサイトを情報源として見ることを学生に促す最も簡単な方法は、同じトピックについて異なる観点を持つ複数のサイトを比較させることである
 - 観点という概念の理解を深めるだけでなく、現在使用されている伝統的なURL/著者/バイアスのチェックリストの確認を超えた、重要なウェブリテラシースキルが身につく

- ・ Wayback Machine (<https://archive.org/web/>) を活用すると、ウェブサイトの情報源として分析しやすい
 - 1996 年以降のウェブページのコピーが 2,990 億枚以上含まれている
 - 現代の歴史を記述する際、ウェブサイトを一次史料として使用する歴史家もいる
 - 9.11 同時多発テロや、2008 年の世界金融危機などの歴史的に重要な出来事があった日のニュースサイトを調べるなどのアプローチも取れる

(2) 型にはまっていない情報源に従事させる

- ・型にはまっていない情報源とは、歴史の授業において有効な情報源として受け入れられてこなかったもので、明確な著者名がなかったり、質に問題があるとされているもの
- ・生徒がオンラインを使って調査する際、型にはまっていない情報源を最も多く使うため、このタイプを議論から外すわけにはいかない (Konieczny, 2016)
- ・歴史的証拠の理解を深め、歴史の探究プロセスをより明らかにするために、以降では、Wikipedia のようなオープンソースサイトの活用を検討する
- ・オープンソースサイトの使用は、調査スキル(文献の発見、批評、ワークに引用する能力)の向上、文章の質向上、モチベーション向上など、多くのメリットが指摘されている (Konieczny, 2016)
- ・歴史の授業で Wikipedia を使った課題を出す場合、複雑なものである必要はなく、調査のスキルと批判的な分析のスキルの両方を磨くために使える
 - 課題例 1 = 地元の歴史に関して関心を持っていること、かつ十分が一次史料が手に入るもので、Wikipedia の記事を作成させる
 - 課題例 2 = Trove や AWM などのデジタルアーカイブの資料を使い、現在載っていない人物や出来事に関する記事を作成させる
 - 課題例 3 = 使用された情報源や、編集されたもの、編集者からの議論を検証させて、既存の記事を批判的に評価させる
- ・論争中になっているトピックの記事の編集履歴の分析も準備的に効果的 (Davies, 2010)
 - 編集履歴をめぐる議論を利用することで、記事作成のプロセスと、対照的な歴史的視点を見極めるという重要な要素に注目させられる
- ・Wikipedia を使った課題は、歴史的証拠、歴史の探究の性質、異なる証拠から歴史のナラティブが構築されるプロセスについて、批判的な理解を深める機会を与えてくれる

(3) 生の素材を使用する

- ・文字、地図、写真、フィルム、アーティファクト(工芸品)は、歴史の「素材(Stuff)」であり、歴史家の叙述を構築するための、まさに素材となるものである
- ・素材を探す際に有用なサイトの例=NLA の Trove アーカイブ (<https://trove.nla.gov.au>)
- ・このタイプの教育における原則として、歴史の探究における、複雑な性質、問題の多い性質、よく論争になる性質を明らかにする際に役立つ資料を選ぶことが挙げられる
 - 複数の解釈が可能な、リッチな資料を選ぶようにし、妥当な解釈をするために、それら

の資料に取り組みせながら推論させるのがオススメ

- ・良い事例としては、Hangen (2015) の研究が挙げられる
 - 最近の歴史的な出来事に関する 3~5 つの一次史料を集めさせ、それを別の生徒に渡して史料の質を評価させ、新たな史料を追加させた上でその正しさを説明させた
 - 何度も繰り返すうちに、情報源の収集とその追加の理由がよりリッチになった
 - デジタルの情報源の使用に関する問題や倫理についての理解も深まった

■批判的なウェブリテラシー (pp.240-242)

- ・歴史教育者にとっての典型的な目標が、民主的なシティズンシップを生徒に準備させることだと考えると、オープンなマインドかつ批判的なマインドでウェブサイトにもアプローチさせることは、もう 1 つの重要な課題といえる
- ・生徒たちがウェブを批判的に見ることができるようになるアプローチを 3 つ紹介する

(1) 古典的なアプローチ

- ・情報源の場所、バイアスの発見、著者の動機、URL の確認、ページに含まれるリンクの検証、他の要素との関連性の評価、といった基準を含むチェックリストを使うタイプのアプローチ(Taylor & Young 2003)
- ・ただし、この基準は印刷したものがベースになっているので、ウェブサイト上だと脆弱(ウェブサイトの開発者は、上記の基準をすべて満たすようにデザインするから)

(2) 概念的なアプローチ

- ・情報のデザインや外観、情報へのアクセス性、検索エンジンの役割、ハイパーテキストの機能、インターネット利用を取り巻く社会的な実践など、評価に関するウェブベースの情報ユニークな特徴を中心に評価させるアプローチ
 - 「サイトはどのようにデザインされているのか、それによってコンテンツに対し、どのように感じるか」など自問自答することで批判的な意識を活性化できる

(3) モデリング

- ・上記の 2 つのアプローチの両方を実施する際に最も良いのは、教師によるモデリング
- ・モデリングを授業に組み込む場合、生徒が課題を完成させるために使用されるとされる正統的なウェブサイトを利用する方が簡単だが、批判的なウェブリテラシーを指導したい場合は、デマサイトを使用することも有効

■結論 (p.242)

- ・ウェブサイトを信頼できるかできないかという二元的な見方から脱却することが大事
- ・ウェブサイトを、歴史のコンテンツの保管場所と見なしたり、歴史の探究プロセスにおける隠された情報源と見なすのではなく、豊かで微妙なニュアンスに満ちた歴史の情報源として扱うことが重要